



角川文庫

—1317—

土

長塚節



角川書店



庫 文 川 角

土



昭和三十一年五月五日
昭和三十五年五月三十日
初版發行
十版發行

定價百拾圓

著 作 者
長 塚 節
なが つか たかし

發 行 者
角 川 源 義

印 刷 者
中 内 あ き 子
東京都千代田區飯田町一ノ二三

發 行 所

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
株式會社 角 川 書 店
かど かは しよ てん
電話九段(331)〇二二(代表)

落丁・亂丁本はお取替へ致します

Printed in Japan

中光印刷・本間製本



角川文庫

—1317—

土

長塚節



角川書店





『土』に就て

「土」が「東京朝日」に連載されたのは一昨年の事である。さうして其責任者は余であつた。所が不幸にも余は「土」の完結を見ないうちに病氣に罹つて、新聞を手にする自由を失つたぎり、又「土」の作者を思ひ出す機會を有たなかつた。

當初五六十回の豫定であつた「土」は、同時に意外の長篇として發達してゐた。途中で話の緒口を忘れた余は、再びそれを取り上げて、矢鱈な區切から改めて讀み出す勇氣を鼓舞しにくかつたので、つい夫限に打ち遣つたやうなものゝ、腹のなかでは私かに作者の根氣と精力に驚ろいてゐた。「土」は何でも百五六十回に至つて漸く結末に達したのである。

冷淡な世間と多忙な余は其後久しく「土」の事を忘れてゐた。所がある時此間亡くなつた池邊君に會つて偶然話頭が小説に及んだ折、池邊君は何故「土」は出版にならないのだらうと云つて、大分長塚君の作を褒めてゐた。池邊君は其當時「朝日」の主筆だつたので「土」は始から仕舞迄眼を通したのである。其上池邊君は自分で文學を知らないと言ひながら、其實摯實な批評眼をもつて「土」を根氣よく讀み通したのである。余は出版界の不景氣のために「土」の單行本が出る時機がまだ來ないのだらうと答へて置いた。其時心のうちでは、随分「土」に比べると詰らないものも公けにされる今日だから、出来るなら何時か書物に纏めて置いたら作者の爲に好からうと思つたが、

不親切な余は其日が過ぎると、又「土」の事を丸で忘れて仕舞つた。

すると此春になつて長塚君が突然尋ねて来て、漸く本屋が「土」を引受ける事になつたから、序を書いて呉れまいかといふ依頼である。余は其時自分の小説を毎日一回づつ書いてゐたので、「土」を読み返す暇がなかつた。已を得ず自分の仕事に済む迄待つてくれと答へた。すると長塚君は池邊君の序も欲しいから序で紹介して貰ひたいと云ふので、余はすぐ承知した。余の名刺を持つて「土」の作者が池邊君の玄關に立つたのは、池邊君の母堂が死んで丁度三十五日に相當する日とかで、長塚君はたゞ立ちながら用事文を頼んで歸つたさうであるが、それから三日して肝心の池邊君も突然亡くなつて仕舞つたから、同君の序はどう／＼手に入らなかつたのである。

余は「彼岸過迄」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷を読み出した。思つたよりも長篇なので、前後半日と中一日を丸潰しにして漸く業を卒へて考へて見ると、中々骨の折れた作物である。余は元來が安價な人間であるから、大抵の人のものを見ると、すぐ感心したがる癖があるが、此「土」に於ても全くさうであつた。先づ何よりも先に、是は到底余に書けるものでないと思つた。次に今の文壇で長塚君を除いたら誰が書けるだらうと物色して見た。すると矢張誰にも書けさうにないといふ結論に達した。

尤も誰にも書けないと云ふのは、文を遣る技倆の點や、人間を活躍させる天賦の力を指すのではない。もし夫れ丈の意味で誰も長塚君に及ばないといふなら、一方では他の作家を侮辱した言葉にもなり、又一方では長塚君を擔ぎ過ぎる策略とも取れて、何方にしても作者の迷惑になる計である。余の誰も及ばないといふのは、作物中に書いてある事件なり天然なりが、まだ長塚君以外の人の研究に上つてゐないといふ意味なのである。

「土」の中に出て来る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、たゞ土の上に生み付けられて、土と共に生長した蛆同様に憐れな百姓の生活である。先祖以來茨城の結城郡に居を移した地方の豪族として、多數の小作人を使用する長塚君は、彼等の獸類に近き、恐るべく困憊を極めた生活状態を、一から十迄誠實に此「土」の中に收め盡したのである。彼等の下卑で、淺薄で、迷信が強くて、無邪氣で、狡猾で、無欲で、強欲で、殆んど余等（今の文壇の作家を悉く含む）の想像にさへ上りがたい所を、あり／＼と眼に映るやうに描寫したのが「土」である。さうして「土」は長塚君以外に何人も手を着けられ得ない、苦しい百姓生活の、最も獸類に接近した部分で、精細に直敘したものであるから、誰も及ばないと云ふのである。

人事を離れた天然に就いても、前同様の批評を如何な讀者も容易に肯はなければ濟まぬ程、作者は鬼怒川沿岸の景色や、空や、春や、秋や、雪や風を綿密に研究してゐる。蟲のもの、畔に立つ榛の木、蛙の聲、鳥の音、苟くも彼の郷土に存在する自然なら、一點一畫の微に至る迄悉く其地方の特色を具へて敘述の筆に上つてゐる。だから何處に何う出て來ても必ず獨特である。其獨特な點を、普通の作家の手に成つた自然の描寫の平凡なものに比べて、余は誰も及ばないといふのである。余は彼の獨特なのに敬服しながら、そのあまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞ふ失敗を歎じた位、彼は精緻な自然の觀察者である。

作としての「土」は、寧ろ苦しい讀みものである。決して面白いから讀めとは云ひ悪い。第一に作中の人物の使ふ言葉が余等には餘り縁の遠い方言から成り立つてゐる。第二に結構が大きい割に、年代が前後數年にわたる割に、周圍に平たく發達したがる話が、筋をくつきりと描いて深くなりつつ前へ進んで行かない。だから全體として讀者に加速度の興味を與へない。だから事件が錯綜纏

綿して縛れながら讀者をぐい／＼引込んで行くよりも、其地方の年中行事を怠りなく丹念に平叙して行くうちに、作者の拵らへた人物が斷續的に活躍すると云つた方が適當になつて来る。其所に聊か人を魅する牽引力を失ふ恐が潜んでゐるといふ意味でも讀みづらい。然し是等は單に皮相の意味に於て讀みづらいので、余の所謂讀みづらいといふ本意は、篇中の人物の心なり行なりが、たゞ壓迫と不安と苦痛を讀者に與へる丈で、毫も神の作つてくれた幸福な人間であるといふ刺戟と安慰を與へ得ないからである。悲劇は恐しいに違ない。けれども普通の悲劇のうちには悲しい以外に何かの償ひがあるので、讀者は涙の犠牲を喜ぶのである。が、「土」に至つては涙さへ出されない苦しさである。雨の降らない代りに生涯照りつこない天氣と同じ苦痛である。たゞ土の下へ心が沈む丈で、人情から云つても道義心から云つても、殆んど此壓迫の賠償として何物も與へられてゐない。たゞ土を掘り下げて暗い中へ落ちて行く丈である。

「土」を讀むものは、屹度自分も泥の中を引き摺られるやうな氣がするだらう。余もさう云ふ感じをした。或者は何故長塚君はこんな讀みづらいものを書いたのだと疑がふかも知れない。そんな人に對して余はたゞ一言、斯様な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舎に住んで居るといふ悲慘な事實を、ひとと一度は胸の底に抱き締めて見たら、公等の是から先の人生觀の上に、又公等の日常の行動の上に、何かの參考として利益を與へはしまいかと聞きたい。余はとくに歡樂に憧憬する若い男や若い女が、讀み苦しいのを我慢して、此「土」を讀む勇氣を鼓舞する事を希望するのである。余の娘が年頃になつて、音樂會がどうだの、帝國座がどうだのと云ひ募る時分になつたら、余は是非此「土」を讀ましたいと思つて居る。娘は屹度厭だといふに違ない。より多くの興味を感じる戀愛小説と取り換へて呉れといふに違ない。けれども余は其

時娘に向つて、面白いから讀めといふのではない。苦しいから讀めといふのだと告げたいと思つて居る。参考の爲だから、世間を知る爲だから、知つて己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる爲だから我慢して讀めと忠告したいと思つて居る。何も考へずに暖かく生長した若い女（男でも同じである）の起す菩提心や宗教心は、皆此暗い影の奥から射して來るのだと余は固く信じて居るからである。

長塚君の書き方は何處迄も沈着である。其人物は皆有の儘である。話の筋は全く自然である。余が「土」を「朝日」に載せ始めた時、北の方のSといふ人がわざ／＼書を余のもとに寄せて、長塚君が旅行して彼と面會した折の議論を報じた事がある。長塚君は余の「朝日」に書いた「滿韓ところどころ」といふものをSの所で一回讀んで、漱石といふ男は人を馬鹿にして居るといつて大いに憤慨したさうである。漱石に限らず一體「朝日新聞」の記者の書き振りは皆人を馬鹿にして居ると云つて罵つたさうである。成程眞面目に老成した、殆んど嚴肅といふ文字を以て形容して然るべき「土」を書いた、長塚君としては尤もの事である。「滿韓ところ／＼」杯が君の氣色を害したのは左もあるべきだと思ふ。然し君から輕佻の疑を受けた余にも、眞面目な「土」を讀む眼はあるのである。だから此序を書くのである。長塚君はたま／＼「滿韓ところ／＼」の一回を見て余の浮薄を憤つたのだらうが、同じ余の手になつた外のものに偶然眼を觸れたら、或は反對の感を起すかも知れない。もし余が徹頭徹尾「滿韓ところ／＼」のうちで、長塚君の氣に入らない一回を以て終始するならば、到底長塚君の「土」の爲に是程言辭を費やす事は出來ない理窟だからである。

長塚君は不幸にして喉頭結核にかゝつて、此間迄東京で入院生活をして居たが、今は養生旁旅行の途にある。先達てかねて紹介して置いた福岡大學の久保博士からの來書に、長塚君が診察を依

頼に見えたところから、今頃は九州に居るだらう。余は出版の時機に後れないで、病中の君の爲に、「土」に就いて是丈の事を云ひ得たのを喜ぶのである。余がかつて「土」を「朝日」に載せ出した時、ある文士が、我々は「土」などを讀む義務はないと云つたと、わざ／＼余に報知して來たものがあつた。其時余は此文士は何の爲に罪もない「土」の作家を侮辱するのだらうと思つて苦々しい不愉快を感じた。理窟から云つて、讀まねばならない義務のある小説といふものは、其小説の校正者か、内務省の檢閲官以外にさうあらう筈がない。わざ／＼斷わらんでも厭なら厭で黙つて讀まずに居れば夫迄である。もし又名の知れない人の書いたものだから讀む義務はないと云ふなら、其人は只名前丈で小説を讀む、内容などには頓着しない、門外漢と一般である。文士ならば同業の人に對して、たとひ無名氏にせよ、今少しの同情と尊敬があつて然るべきだと思ふ。余は「土」の作者が病氣だから、此場合には猶ほ更らさう云ひたいのである。

明治四十五年五月

夏目漱石

土

烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をごろつと打ちつけては又ごろつと打ちつけて皆瘦こけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひうひうと悲痛の響を立てて泣いた。短い冬の日はまだ落ちかけて黄色な光を放射しつつ目叩いた。さうして西風はどうかするとぱつたり止んで終つたかと思ふ程靜かになつた。泥を拗切つて投げたやうな雲が不規則に林の上に凝然とひつついて居て空はまだ騒がしいことを示して居る。それで時々思ひ出したやうに、木の枝がざわざわと鳴る。世間が俄に心ほそくなつた。

お品は復た天秤を卸した。お品は竹の短い天秤の先へ木の枝で拵へた小さな鍵の手をぶらさげてそれで手桶の柄を引つ懸けて居た。お品は百姓の隙間には村から豆腐を仕入れて出ては二三ヶ村を歩いて來るのが例である。手桶で持ち出すだけのことだから資本も要ない代には儲も薄いのであるが、それでも百姓ばかりして居るよりも日毎に目に見えた小遣錢が取れるのもう暫くさうして居た。手桶一提の豆腐ではいつもの處をぐるりと廻れば屹度なくなつた。還りには豆腐の壞れで幾らか白くなつた水を棄てて天秤は輕くなるのである。お品は何時でも日のあるうちに夜なべに縄に綿ふ藁へ水を掛けて置いたり、落葉を攫つて見たりそこらこらと手を動かすことを止めなかつた。天性が丈夫なのでお品は仕事を苦しいと思つたことはなかつた。

それが此日は自分でも酷く厭であつたが、冬至が來るから蒟蒻の仕入をしなくちや成らないとい

つて無理に出たのであつた。冬至といふと俄商人がぞくぞくと出来るので急いで一遍歩かないと、其俄商人に先を越されて畢ふのでお品はどうしても凝然としては居られなかつた。蒟蒻は村には無いので、仕入をするのには田圃を越えたり林を通つたりして遠くへ行かねばならぬ。それでお品は其途中で商をしようと思つて此の日も豆腐を擔いで出た。生憎夜から冴え切つて居た空には烈しい西風が立つて、それに逆つて行くお品は自分で酷く足下のふらつくのを感じた。ぞくぞくと身體が冷えた。さうして豆腐を出す度に水へ手を刺込むのが、慄へるやうに身に染みた。かさかさに乾燥いた手が水へつける度に赤くなつた。鞭がぴりぴりと痛んだ。懇意なここでお品は落葉を一燵べ焚いて貰つては手を翳して漸と暖まつた。蒟蒻を仕入れて出た時はそんなこんなで暇をとつて何時になく遅かつた。お品は林を幾つも過ぎて自分の村へ急いだが、疲れもしたけれど懶いやうな心持がして幾度か路傍へ荷を卸しては休みつつ來たのである。

お品は手桶の柄へ横たへた竹の天秤へ身を投げ懸けてどかりと膝を折つた。ぐつたり成つたお品はそれでもなくとも不見目な姿が更に檢束なく亂れた。西風の餘波がお品の後から吹いた。さうして西風は後で括つた穢い手拭の端を捲つて、油の切れた埃だらけの赤い髪の毛を扱きあげるやうにして其垢だらけの首筋を剝出にさせて居る。夫と共に林の雑木はまだ持前の騒ぎを止めないで、路傍の梢がずつと撓つてお品の上からそれを覗かうとすると、後からも後からも林の梢が一齊に首を出す。さうして暫くしては又一齊に後へぐつと戻つて身體を横に動揺ながら笑ひ私語くやうにざわざわと鳴る。

お品は身體に變態を來したことを意識すると共に恐怖心を懷き始めた。三四日どうもなかつたのだから大丈夫だとは思つて見ても、慄う凝然として居ると遠くの方へ滅入つて畢ふ様な心持がして、

不斷から幾らか逆上性でもあるのだがさう思ふと耳が鳴るやうで世間が却て靜かに成つて畢つたやうに思はれた。不圖氣が付いた時お品はきはきとして天秤を擔いだ。林が竭きて田圃が見え出した。田圃を越せば村で、自分の家は田圃のとりつきである。青い煙がすつと騰つて居る。お品は二人の子供を思つて心が跳つた。林の外れから田圃へおりる處は僅かに五六間であるが、勾配の峻しい坂でそれが雨のある度にそこの水を聚めて田圃へ落す口に成つて居るので自然に土が挾られて深い窪が形られて居る。お品は天秤を斜に横へ向けて、右の手を前の手桶の柄へ左の手を後の手桶の柄へ掛けて注意しつつおりた。それでも殆んど手桶一杯に成り相な蒭蕒の重量は少しふらつく足を危く保たしめた。やつと人の行き違ふだけの狭い田圃をお品はそろそろと運んで行く。お品は白茶けた程古く成つた股引へそれでも先の方だけ繼ぎ足した足袋を穿いて居る。大きな藁草履は固めたやうに霜解の泥がくつついて、それがぼたぼたと足の運びを鈍くして居る。狭く連つて居る田を豎に用水の堀がある。二三株比較的大きな榛の木立つて居る處に僅一枚板の橋が斜に架けてある。お品は橋の袂で一才立ち止つた。さうして近づいた自分の家を見た。村落は臺地に在るのでお品の家の後は直に斜に田圃へずり落ち相な林である。櫓や雑木の間に短い竹が交つて居る。いい加減大きくなつた櫓の木は皆葉が落ち盡して居るので、其小枝を透して凹んだ棟が見える。白い羽の鶏が五六羽、がりがりと爪で土を搔つ掃いては嘴でそこを啄いて又がりがりと土を搔つ掃いては餘念もなく夕方の飼料を求めつつ田圃から林へ還りつつある。お品は非常な注意を以て斜な橋を渡つた。四足目にはもう田圃の土に立つた。其の時は日は疾に没して見渡す限り、田から林から世間は唯黃褐色に光つてさうしてまだ明るかつた。お品は田圃からあがる前に天秤を卸して左へ曲つた。自分の家の林と田との間には人の足趾だけの小徑がつけてある。お品は其小徑と林との境界を劃つ

て居る牛胡頰子の側に立つた。鶏の爪の趾が其處の新らしい土を掻き散らしてあつた。お品は土を手で聚めて草履の底でそくそくとならした。お品の姿が庭に見えた時には西風は忘れたやうに止んで居て、庭先の栗の木にぶつ懸けた大根の乾びた葉も動かなかつた。白い鶏はお品の足もとへちよろちよろと駈けて来て何か欲し相にけるつと見上げた。お品は平常のやうに鶏杯へ構つては居られなかつた。お品は戸口に天秤を卸して突然

「おつう」と喚んだ。

「おつかあか」と直におつぎの返辭が威勢よく聞えた。それと同時に竈の火がひらひらと赤くお品の目に映つた。朝から雨戸は開けないので内はうす闇くなつて居る。外の光を見て居たお品の目には直ぐにはおつぎの姿も見えなかつたのである。戸口からではおつぎの身體は竈の火を掩うて居た。返辭すると共に身體を振つたので其赤い火が見えたのである。

おつぎの脊に居た與吉はお品の聲を聞きつけると、

「まんまんま」と兩手を出して下りようとする。お品はおつぎが帶を解いてる間に壁際の麥藁俵の側へ藟藟の手桶を二つ並べた。與吉はお袋の懷に抱かれて碌に出もしない乳房を探つた。お品は竈の前へ腰を掛けた。白い鶏は掛梯子の代に掛けてある荒縄でぐるぐる捲にした竹の幹へ各自に爪を引つ掛けて兩方の羽を擴げて身體の平均を保ちながら慌てたやうに埒へあがつた。さうして青い煙の中に凝然として目を閉ぢて居る。

お品は家に歸つて幾らか暖まつたがそれでも一日冷えた所爲かぞくぞくするのが止まなかつた。さうして後に近所で風呂を貰つてゆつくり暖まつたら心持も癒るだらうと思つた。竈には小さな鍋が懸つて居る。汁は蓋を漂はすやうにしてぐらぐらと煮立つて居る。外もいつかとおつぷり闇くなつ

た。おつぎは竈の下から火のついてる鹿朶を一つとつて手ランプを點けて上り框の柱へ懸けた。お品はおつぎが單衣へ半纏を引つ掛けた儘であるのを見た。平常ならそんなことはないのだが自分が酷くぞくぞくとして心持が悪いのでつい氣になつて

「おつう、そんな姿で汝や寒かねえか」と聞いた。それから手拭の下から見えるおつぎのあどけない顔を凝然と見た。

「寒かあんめえな」おつぎは事もなげにいつた。與吉は懷の中で頻りにせがんで居る。お品は平常のやうでなく何も買つて來なかつたので、ふと困つた。

「おつう、そこらに砂糖はなかつたつけえ」お品はいつた。おつぎは黙つて草履を脱棄てて座敷へ駆けあがつて、戸棚から小さな古い新聞紙の袋を探し出して、自分の手の平へ少し砂糖をつまみ出して

「そらそら」といひながら、手を出して待つて居る與吉へ遣つた。おつぎは砂糖の附いた自分の手を嘗めた。與吉は其砂糖をお袋の懷へこぼしながら危な相につまんでは口へ入れる。砂糖が竭きた時與吉は其べとついた手をお袋の口のあたりへ出した。お品は與吉の兩手を攫へて舐つてやつた。お品は鍋の蓋をとつて鹿朶の焰を翳しながら

「こりや芋か何でえ」と聞いた。

「うむ、少し芋足して暖め返したんだ」

「おまんまは冷たかねえけ」

「それから雑炊でも拵えべと思つてたのよ」

お品は熱い物なら身體が暖まるだらうと思ひながら、自分は酷く頼いので何でもおつぎにさせて

居た。おつきは粘り氣のない麥の勝つたぼろぼろな飯を鍋へ入れた。お品は鹿朶を一燵べ突つこんだ。おつきは鍋を卸して茶釜を懸けた。ほうつと白く蒸氣の立つ鍋の中をお玉杓子で二三度掻き立てておつきは又蓋をした。おつきは戸棚から膳を出して上り框へ置いた。柱に點けてある手ランプの光が届かぬのでおつきは手探りでして居る。お品は左手に抱いた與吉の口へ箸の先で少しづつ含ませながら雑炊をたべた。お品は芋を三つ四つ箸へ立てて與吉へ持たせた。與吉は芋を口へ持つていつて直ぐに熱いというて泣いた。お品は與吉の頬をふうふうと吹いてそれから芋を自分の口で嚙んでやつた。お品の茶碗は慍うして冷えた。おつきは冷たくなつた時鍋のと換てやつた。お品は欲しくもない雑炊を三杯までたべた。幾らか腹の中の暖かくなつたのを感じた。さうして漸く水離れのした茶釜の湯を汲んで飲んだ。おつきは庭先の井戸端へ出て鍋へ一杯釣瓶の水をあけた、おつきが戻つた時

「おつう、今夜でなくつてもええや」とお品はいつた。おつきは黙つて俵の側の手桶へ手を掛けて

「此へも水入て置かなくつちやなんめえ」

「さうすればええが大變だらええぞ」

お品がいひ切らぬうちにおつきは庭へ出た。直ぐに洗つた鍋と手桶を持つて暗い庭先からぼんやり戸口へ姿を見せた。闕へ一寸手桶を置いてお品と顔を見合せた。手桶の水は半分で兩方の蒟蒻へ水が乗つた。

お品は三人連で東鄰へ風呂を貰ひに行つた。東鄰といふのは大きな一構で蔚然たる森に包まれて居る。